オックスフォード拝見

佐々部英男

イギリスの冬はとかくうっとうしい。十二月ともなれば、朝食に階下へおりても、あまりグッドモーニングとはいわない。大抵、口の中でグッドをごまかして、モーニングだけで済ましている。掃除にくる小母さんが「本当はグッドじゃないんですがネェ」とこぼしていたのは正直だ。

しかし、このような冬の朝にも、オックスフォードは一きわ美しい。聖ジャイルズ大通から左へ折れ、クランマァ、リドリィ、ラティマァ三人の坊さんが火刑に処せられた辺りを過ぎると、まもなくブラックウェルの前にでる。この書店とは、数年来、カタログを送ってもらってきた馴見だ。入ってみると「在学生諸君は店頭備付けのカタログをご利用下さい。オックスフォードからゴウダウンされるようになったら差上げます」という掲示が目についた。そのブラックウェルの隣の新ボドリアン図書館から四辻を斜に横切ると、ニューコレジとハートフォード　コレジとの間の小道に入る。自分はこの小道が大好きだった。コレジにそって四、五辺まがると大通「ハイ」につきあたり、すぐ左手が講義場だ。下宿から十五分ぐらいの道のりであったが、古く落着いた建物づたいに歩いていくうちに、知らず識らず学問に集中してしまう。ここいらが老舗と新制大学との相違であろう。今日、大通は騒々しくなり、モリスの自動車工場などもあって、半工業都市化したと見る向きもあるが、やはり学問には最適の環境といえそうだ。

講義は大抵講義場（正確にいえば試験場）Examination Schools で行われる。この建物の大教室には 'Schola Magna Orientalis' とか 'Schola Magna Australis' といったラテン名がついており、全体では複数になるんだなと、語学教師は先ず感心した。それに休講の掲示がいい。'Prof A regrets that he will not be able to lecture today' とか 'Mr B will NOT lecture this week' とか 'Miss C's lecture for today is cancelled' とか変化がある。開講表をみると、ここでは文字通り英文学科で、四十ほどの講義のうち米文学に関するものは一つもない。英文学もキプリング、コンラッドあたりまでだ。しかしベーオウルフからヴィクトリア朝までは、主な作家か時代別の講義がまんべんなくあって、全体として英語史英文学史をなしている。比重の大きいのがOEMEに関するもので、全体の三分の一を占める。これは古い文献を抱え、国語国文学の立場にあるためでもあるが、ケンブリッジではチョーサァから必修なのにたいし、オックスフォードではベーオウルフからという特色のためでもあろう。「だから、ケンブリッジの卒業生では英語の教師として不十分だ」とオックスフォードではいう。しかしオックスブリッジ

の対抗意識は決して偏狭なものではない。昨冬の話題になった詩学教授の選挙でも、英文科では外部の気風をいれるために、レン教授がスポンサーになって、F・R・リーヴィスを支持したことは記憶されてよいであろう。

講義そのものは他の大学に較べると比重が軽いようだ。第一、一時間単位（正味五十五分位）だ。第二に三学期とも八週間単位だが、最後の週は休むのが内規になっている。第三に教師自身もあまり講義にでるなという。余り沢山でると、自分の研究時間がなくなるからという訳だ。聴講者については、学園誌 *ISIS* に統計がのっていたので、そのまま拝借させていただく。

Question: How many lectures a week did you attend in your second year ?

	Total	*Arts*	*Science*
	%	%	%
None	19	23	8
One or two a week	35	42	13
Three to five a week	30	27	36
More	16	8	43
Not answered	—	—	—

Question: How many lectures did your tutor advise you to attend a week in your second year ?

	Total	*Arts*	*Science*
	%	%	%
None	12	10	17
One or two	25	30	8
Three or more	61	58	71
Not answered	2	2	4

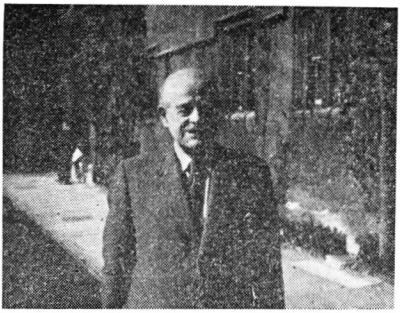
ついでながら、同誌によると、オックスフォードでは、文科系の学生が圧倒的に多く80%を占め、それに対しケンブリッジでは52%、イギリスの大学平均では35%という数字をあげている。（一九五五年の Kelsall Report による）

これだけでは紳士教育というよりむしろ怠け者教育ではないかと思われるが、これを補って余りあるのが個人指導制度だ。この制度は筆者のような聴講生格のものにも適用され、週一回一ポンドの謝礼を払って、一時間乃至一時間半の指導をうける。筆者の場合にはレン教授が当られた。教授が個人指導に当るのは大学院学生に限られるらしく、tutor の良し悪しで違ってくるこの制度では、非常に幸運だった。同教授が日本人を教えられるのは二人目らしい。「一昔前、自分が教えた日本の女子学生は会話がうまかった。たしかナカムラさんといわれ、哲学者と結婚された」と、同志社の高田教授のことはよく憶えておられた。しかし、日本の学者の会話はあまり信用がない。世界言語学大会で日本の言語学者（表音文字学者）の講演をきいたが、始めから終りまでさっぱり解らなかった。後で滞在の先生に「ありゃ何語でしゃべったん

だい」と聞いたら英語だった、という話は二へんされ、イントネイションの研究が足りないんじゃないかという意見だった。とに角、こちらの表現力を考えられてか、それとも基礎を固めるのが第一と思われてか、恐らく両方であろうが、指導もあくまでテキストに即したものであった。毎週指定されたテキストを読んでゆき、専ら先生に疑問の箇所を説明していただく。時たま、こちらが一節を現代英語に訳すというのがきまりで、語学教師には一番アトホームなやり方だった。レン教授は決して近寄り難い先生ではなかったが、一対一となるとこちらの準備も違う。あまりやったことのない図書館通いもするようになった。それに師弟間の親密な関係もできてくる。余裕があれば、我が国でも検討したい制度だ。

レン教授についてもう少し書く。というのは、渡英前にマシューズ氏から「イギリス人は友達をつくるのも遅いが、友達を捨てるのも遅い」と聞かされ、覚悟はしていたものの、果してそうだった。殊にオックスフォードにおいて然りで、ロンドン大学を卒業しオックスフォードで大学院を修めている学生が「オックスフォードでは友達ができないだろう」といったのからも、こちらのせいだけでもなさそうだ。結局、コレジに入らない限り、無理ということらしい。せめて何かのクラブにでも入会すればよかったのだが、何しろ疲れた。午前中二時間も講義にでると、午後は寝床にもぐりこんでBBCを聴くのが関の山で、おまけに週の四日位は個人指導という奴が頭を離れない。とうとうオックスフォード滞在の二学期を通じて、話相手はほとんどレン教授と下宿の女中オリーヴに限られてしまった。この女中がいわば会話の先生で、フォグ（霧）といったら、オックスフォード　アクセントでは、フォッグと思いきり語頭を強く発音するのだと教えてくれた。ただし、アネモネの花を何べん尋ねても、アネノミと音位転換をやって教えてくれる先生だからあてにはならない。結局、レン教授ということになる。

オックスフォードで気持ちよく感じたのは、学問の世界では人種的偏見がないということであった。これがロンドンだと、筆者の滞英中ずっと、日本軍の英国俘虜虐待を訴える展覧会が大通で開かれており、ごく一部にはこういう感覚も残っているのかと残念に思った記憶がある。とに角、レン教授にはみじんも差別は見られず、実にあけすけに話された。ただ、日本という国は、戦後イギリスからアメリカに鞍替えしてしまったと思いこんでおられ「何でも彼でもアメリカの真似をするのは為にならない」といわれた。殊に、アメリカ



レン教授

言語学の最近の傾向には同調されない。一度は教室で「新しい記述的な方法というのは、何らかの意味で生きている言語にのみ適用できるので、OEの発音の場合には、従来の歴史的方法と比較言語学的方法による他はない」といわれた。これは、現代英語の場合にのみ新しい方法の価値を認めるということだ。もう一度は個人的に「構造言語学というのは、本来インディアンの言語のような文字のない言語のために考えられたもので、英語のような長い文学的伝統をもつ言語には不十分だ。英語教育上の効果となると、結局述語を置換えるだけで、従来の文法でいっても同じようなことになるんじゃないか」といわれた。筆者にこの意見の可否を論ずる資格はないが「英語の文学的伝統」という言葉は注目に値する。というのはオックスフォードの英語学を考えるときに、先ず浮んでくるのはこの言葉だ。英語学といっても、オックスフォードではあくまでテキストの解釈が中心になる。結局、オックスフォードのゆき方、アメリカの新しいゆき方、それぞれ違った性質のものである以上、むしろ相補うものという気がする。それにしても、OE MEのテキストの指導という点では、レン教授以上の先生があるとは思われない。語句の解釈はもちろん、OE詩の韻律や、写本に当ることの大切さなど、噛んでふくめるように指導して下さった。ブリティシュ　カウンシルのボトロール氏は憶えておられ「彼はビッグマンだろう」と聞かれるので、何気なく「イエス」といったら、即座に「in two senses」という使い方を教えて下さったのも先生だ。